



《「思い出」を「作る」》に関する一考察：書き言葉コーパス・話し言葉コーパスでの使用頻度比較から

中尾，桂子

(Citation)

統計数理研究所共同研究レポート, 469:63-82

(Issue Date)

2024-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487707>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487707>



《「思い出」を「作る」》に関する一考察

—書き言葉コーパス・話し言葉コーパスでの使用頻度比較から—

中尾 桂子(大妻女子大学短期大学部)

A thought on "'Making' 'Memory.'"

From the Frequency Comparisons of Usage in Written and Spoken Corpora.
NAKAO, Keiko (Otsuma Women's University)

概要

自発的、結果的な意味で捉えられる語と、意志性の高い他動的な語が共起することに違和感を覚える人、覚えない人がある。語感の違いは、使用者の年代の違い、すなわち、時代の流れの中での語の意味や意味役割の変化と捉えられるものかもしれない。ことばの変化ならば、時代の流れの中に、語用における変化の様なものが見えるのではないか。そこで、「思い出」を取り上げ、国立国語研究所言語資源開発センターの書き言葉コーパスである BCCWJ、SHC、CHJ、ならびに、話し言葉コーパスである CSJ、CEJC、NUCC、CWPC、COJADS、SSC での共起動詞の頻度を調べた。結果、①「思い出」は、「語る」「残す」といった他動性が明確で、「記憶」と意味上の関連性がある動詞と共起することが多く、意味の上での親和性に関する制約があり得ると考えられた。さらに、②書き言葉 CHJ で、「思い出」が他動性の高い意志動詞と共起する用例が、近代以降にしか見られず、BCCWJ では、特に、90 年代に多いが、2010 年以降は減少していた。これと、違和感を覚える声とを合わせると、規模は小さいが、近代以降の「思い出」の意味や統語上の意味役割に、平成後期の時期に、なんらかの変化が起こっていることもあり得ると考えられた。

キーワード

書き言葉コーパス、話し言葉コーパス、「思い出を作る」、語義、変化

1. はじめに

自発発生的な事態を表す語と、意志性や他動性の高い語(接辞を含む)とが共起することに違和感を覚え、声をあげる人がある。たとえば、以下は、「治る」という自然に起こる現象に、人の意志が色濃く関係する可能形が接続するのはおかしいという感覚を述べている意見である。

aho*****さん
2013/9/3 18:32

自動詞の可能形について 最近見かけたのですが、治れる っていう単語がありました、これは間違ってる日本語じゃないんですか？ 治るなら自然と治る でしょ、どうして可能形なんか使えるんですか？

(Yahoo!Japan 知恵袋, 2024 年 3 月 11 日確認)

https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14112882189

また、語どうしの共起に関しても、「思い出」という、結果として得られる事態に、他動性の明確な意志動詞「作る」をつないで連語にすることに違和感があると述べている人もいる。こちらの例は、連語としての違和感だけではなく、作爲的な操作に対する違和感も重ねていると考えられる。

上西充子

@mu0283

感動を「届ける」、夢を「与える」、思い出を「作る」、どれも違和感しかない。

午後 8:53・2021 年 7 月 6 日

X <https://twitter.com/mu0283/status/1412379081081905161>(2024 年 3 月 11 日確認)

このように、違和感を指摘する人がいるのは、インターネット上のさまざまなサイト、テレビ放送、雑誌等で、実際に、多数の用例が認められるからだと考えられる。たとえば、故意ではないことを意図する語「なる」「気づく」に意志性が前提となる可能形の接尾辞を付けて「～なれる」「気づける」とする例、また、本来、話し手のコントロールが及ばないと考えられる語に他動性が明確な意志動詞を組み合わせた「思い出を作る」のような用例を検索エンジンで探してみると、以下のような用例が多数認められる。

<X 上のつぶやき>

- ・ (多くのしかけがあるから、)この企画、おもしろくなれそう←(企画が面白くなる+可能形)
- ・ 普段気づかなきゃいけないことに気づけない←(「気づくことができない」を可能形で縮約)

<販売されている書籍のタイトル>

- ・ ハワード・J・ロス 著, 御船由美子訳(2021)『なぜあなたは自分の「偏見」に気づけないのか』原書房.
- ・ 高橋リエ(2019)『気づけない毒親』毎日新聞出版.

<Yahoo!Japan 知恵袋の相談>

isn*****さん

2008/10/23 18:50

大至急の質問です。「気づける」「気づけない」は文法的にOK?

文法的に「気づける」とか「気づけない」という言い方は正式にはOKでしょうか。

(以下略)

(Yahoo!Japan 知恵袋, 2024 年 3 月 11 日確認)

https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1120107021

「Yahoo!Japan 知恵袋」等、日常の疑問を気軽に質問できるサイトには、上に類似する質問が焦点を変えてたびたびあがっている。「思い出を作る」に特化すると、文法的な問題として扱わず、

語義の解釈についてを問う投稿も見られる(rrrr2141, 2012)。さらに、投稿型の質問に回答を出すインターネット上のコミュニケーションだけではなく、「思い出を作る」ことに対する意見が展開されるサイトも見られる(emma, 2023、下重,2020)。サイトでは、ことばの操作上の問題として、意図される表現目的をはき違える可能性があることや、目的を見失うことへの警告を通して語感が述べられている。

このような意見からは、他動性の高い意志動詞と共起する語の制限に関する語感を持っている人がいること、さらに、その語感に基づき、違和感を公表し、皆に問いかけて見直しを期待していることがうかがえる。また、違和感の声の内容から、賛否の程度や、違和感を覚える点が異なることもうかがえ、同時に、違和感を覚えない人の語感にもバリエーションがあることが推察される。

特に、可能形を作る接尾辞は、その語感の差には省略という観点や少しひねった独自表現という意識が関係してくる場合もあると考えられ、生産性が高くなっているように見える。それは、上記の2 つめの「Yahoo!Japan 知恵袋」に対する以下の回答のように、違和感を覚える人の提示する表現が「正しい」という感覚が散見されることからもうかがえる。

<Yahoo!Japan 知恵袋への相談>に対する回答部分

ベストアンサー

nic*****さん

2008/10/23 20:09(編集あり)

「気づける」「気づけない」はあまり使いませんが、文法的には、間違いではありません。
「気づく」と「気づける」は同じ動詞ですが、活用の種類が違います。

その他の回答(2 例)

ka0*****さん

2008/10/23 20:17(編集あり)

認められた形です。

(Yahoo ! Japan 知恵袋, 2024 年 3 月 11 日確認)

https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1120107021

賛否の意見や焦点の異なる問題意識を見ると、明確に異なる点を指摘する意見と、語感によって異なる可能性があることを認める意見があることから、すでに、語に対する文化的、文法的、共通認識の変化が、ある程度、起こり始めている可能性が考えられる。そこには、「正しさ」の基盤となる文法的な知識が不正確な人が多くなっていること等、複数の問題が考えられることから、自然現象的な事態に意志性が前提となる可能形の接尾辞が付くか否かという問題を調査するには、下調査等の準備を充分に行う必要があると考えられる。

本稿では、語の組合せを手始めに、他動性の範囲を考える類似の問題だと捉えられる「思い出」を取り上げ、その語に後接する語との組合せ方の動向を考えてみる。すなわち、自然発生的な意味だと捉えられる語と、他動性の高い意志動詞が共起することに対する語感の違いが、使用者の年代の違い、すなわち、時代の流れの中での語の意味や意味役割の変化と捉えられるものなのかということについてである。もし、ことばの変化ならば、時代の流れの中に、語用における変化の流れが見えるのではないかと考えられることから、手始めに、国立国語研究所言語資源開発センター

のコーパスで「思い出」の用例を調べ、ことば遣いに対する感覚や、ことばの変化について考えてみたい。

2. 先行研究

2.1 語の意味

そもそも、この「思い出」という語は、『デジタル大辞泉』(2023.10 小学館)によると、語義が 2 つあり、1 つ目が「過去に自分が出会った事柄を思い出すこと。また、その事柄」、2 つ目が「あることを思い出す^{よすが}になるもの」(傍点は筆者)とされている。第 1 義は記憶の中の「思い出」になる内容そのものを指すが、第 2 義は記憶や「思い出」となる内容を取り出すトリガーとなる思い出を喚起させる事柄を指し、意味の範囲や方向性が異なっている。

語の意味には、通常、辞書的な意味の他に、文化的な意味や、文法的な意味も備わっており、後者 2 つのような意味は、辞書には記述されず、同時代を生きる、同言語話者間の共通認識として暗黙裡に理解されているものである。

辞書の記述には、共通認識が前提、または、推測できる情報が含まれる場合が多い。『デジタル大辞泉』(2023)の「思い出」の第 1 義には、共通認識に直接つながる記述は見られないが、「思い出」には、過去に起こった出来事の中から思い出した断片や、振り返って当時を考えた結果、浮かび上がる出来事の意味に、現在の見方としてどのように捉えるかという「客観的な視点」の存在が認識されていると考えられる。

「思い出」の暗黙裡の意味の 1 つである文法的な意味は、品詞が名詞、かつ、複合名詞であり、普通名詞ではあるが、抽象的でメタ的な名詞である。主題の叙述や名詞の修飾、被修飾語としての使用方法のほかに、動作の対象や手段、目的になる得ると考えられる。主題の叙述として利用される場合は、「～は(が)～だ」の「～だ」の部分で使用され、名詞修飾の場合は「～の～」の形で「の」の前後の部分で使用されると考えられる。そして、動作の対象となる場合は、「思い出」に、「が」「を」「に」といった格助詞が後続共起する。

その他、文章、談話として表現されたときに文に備わる意味がある(森田, 1989:105-106)。構文的意味、限定的意味、場面的意味、結果的意味、比喩的意味等である。このような表現上の意味と、文化的、社会的な意味とが重なり、語感というものが生じてくる。たとえば「思い出」には、記憶の中の断片をまとめて名づける行為が前提となり、そこには、何らかの感情の動きが連動することでの付加価値の付与があり、だから、感情を示唆する「色」が付くために、「懐かしい思い出」「苦い思い出」「甘く切ない思い出」等と言えるのだと考えられる。ある種の前提と操作の結果が「思い出」とまとめてラベル付けされることで「思い出」として認識されるのではないかと考えられるが、このような主観的な印象は、通常、語感と呼ばれるものである。

2.2 意志性や他動性の高い語との共起

日本語は、述語を核とし、1 文中で、述語とそれ以外の各語との関係が、各語に後置される格助詞で示されるという統語構造を持つ。たとえば動詞述語と、その項となる語はその語に後置される

格助詞によって、動詞とその項である各語との統語上の関係、すなわち、「対象」「目的」「手段」といった意味役割が決まる。また、格助詞と、格助詞が後置される語との間には、接続しやすさという点で、意味役割や形態等の関連する性質を共有していることが多いと認められている。

日本語の典型的な他動詞文では、英語で言う主語相当語句に「が」、英語で言う目的語相当語句に「を」の助詞を取ることが多い(角田, 1991)。

ただ、上のような伝統的で、固定的な説明とは異なり、小野(1995)が他動性を傾向や度合いで認識するものと Hopper & Thompson(1980)や Laykoff(1977)を解説しているように、程度の差があるものという認識がなされるようになっている。

伝統的に、他動性は英語の他動詞構文の必須格を説明する際に用いられ、他への働きかけを行う動作を表わす動詞の性質を説明する語とされてきたが、Hopper & Thompson(1980)や Laykoff(1977)らによって、他動性とは、その、他への働きかけを行う性質的傾向、その度合いを指すという考え方が認められるようになった(小野 1995)。

この他動性という程度の差は、動詞の意味によって異なる。また、他動性の高さは、動詞がその他動性で働きかける対象となる語との相性、さらに、両者の関係をつなぐヲ格や、同じく対象との関係を示すニ格、ガ格との相性と関係し、文を組み立てる統語上の機能にも影響する。

たとえば、日本語の格助詞の中に「対象」という意味役割を担う格助詞は「が」「に」等、動詞自体の意味や性質によっていくつか見られる。必ずしも「～を動詞」というパターンを持つ文の動詞の他動性だけが高いというわけではなく、また、格の形の違いによって対象という意味役割の表され方に、他動性の高低差があるというわけでもない。

このような統語上の特徴があることから、ヲ格をとる動詞には、他動性、または、意志性といった、他に働きかける程度の強弱が重要になる(小野 2003)。それは、動詞の意味や他動性の有無によって、補助動詞や接尾辞の承接に制限がかかることによる。たとえば、動作を表す動詞「食べる」に補助動詞「(て)いる」が承接すると、「食べている」となり、食べる等動作が継続された状態を表すことになり、状態性が高まると考えられる。同様に、「(日記を)書く」という意志の明確な動作とその対象となる語の関係のうち、日記に焦点を当てたい場合、「日記が書かれる」と受身形の接尾辞をつけて状態化される。「日記を書く」が「日記が書かれる」になると、他動性や意志性が低くなり、状態性が高くなる。他にも、他動詞は、「主体ガ対象ヲ動詞」の文構造を取るが、自動詞は、「対象ガ動詞」の形になり、動作主体が情報の中で背景化され、他動性が低くなっていく。先に受身形の接尾辞が付くと統語構造が変わると述べたが、動詞が受身形、使役形になることで、他動詞文が自動詞文の構造となり、他動性、意志性が弱まって、現象や状態に焦点が当てられる叙述になる。

日本語母語話者は、共通認識として、各語の辞書的な意味のほかに、このような文法的意味として、意味役割と他動性、意志性に関わる知識を共通認識として持っている。この他動性、意志性と

いう文法上の意味も、他動性におけるコントロールの可否とも連動するもので、動詞の捉え方を考える上で必要な共通認識である。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究の流れと RQ

まず、国立国語研究所言語資源開発センター公開の書き言葉コーパス 3 種で、「思い出」の使用頻度を見てみる。そして、「思い出」と、共起する語のうち、他動性の高い意志動詞と共起する場合の使用頻度を、90 年代、2000 年代、2010 年代等の期間別に調査し、その頻度を比較する。折に触れて同センター公開の話し言葉コーパス中の使用頻度とも比較する。RQ は次の通りである。

RQ1 「思い出」に続く他動的な語はどのようなものが、どの程度存在するか。

RQ2 「思い出」に続く他動的な語の出現率は経年的に増加しているか。

3.2 対象データ

調査対象 2 種のうち、書き言葉コーパスは、現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下 BCCWJ)、昭和・平成書き言葉コーパス(以下 SHC)、日本語歴史コーパス(以下 CHJ)を利用する。話し言葉コーパスは、日本語話し言葉コーパス(以下 CSJ)、日本語日常会話コーパス(以下 CEJC)、名大会話コーパス(以下 NUCC)、現日研・職場談話コーパス(以下 CWPC)、日本語諸方言コーパス(以下 COJADS)、昭和話し言葉コーパス(以下 SSC)を利用する。

これらのコーパスは CHJ 等、一部を除き、サンプルとしての均衡性が高いものだと考える。古典作品のコーパスである CHJ では文脈を維持した作品全体がデータ化されているが、そもそもが、その時代のサンプルとなる要素が各資料にはあると考えれば、少し雑駁ではあるものの、それぞれの使用頻度や使用年代(または筆者年齢等での代替)をおしなべて比較することに、大きな問題はないと考える。

利用コーパスに採録されている日本語の年代、ならびに、データの特徴を表 1 にまとめた。CSJ は公的な場面でのモノログが中心となるため、書き言葉の特徴を有すると考えられるものの、今回は、話し言葉として扱っている。

表 1

調査対象(データ)

種別	コーパス	採録・公開・参与等年代	備考
書き言葉	現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ	1976～2005 年(主書籍は 1986～2005)	現代日本語の書き言葉の全体像をモデル化した日本語の均衡コーパス。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律等のジャンル別に無作為抽出した1億 430 万語のデータを格納

	昭和・平成書き言葉コーパス SHC	1933～2013 年	BCCWJ に接続可能な点から雑誌・書籍・新聞の 3 つのレジスターを採用し、CHJ に接続を考えて、8 年おきの最終年度 1925 年に続く形で収録
	日本語歴史コーパス(CHJ)	～1926 年	奈良時代編 I 万葉集／II 宣命／III 祝詞 平安時代編 I 仮名文学／II 訓点資料 鎌倉時代編 I 説話・随筆／II 日記・紀行／III 軍記 室町時代編 I 狂言／II キリシタン資料 江戸時代編 I 洒落本／II 人情本／III 近松浄瑠璃／IV 随筆・紀行 明治・大正編 I 雑誌／II 教科書／III 明治初期口語資料／IV 近代小説／V 新聞／VI 落語 SP 盤 和歌集編
話し言葉	日本語話し言葉コーパス (CSJ)	2004 年公開	総数 3302 講演。約 90% はモノログ音声、残り約 10% は、対話、朗読、再朗読の音声
	日本語日常会話コーパス (CEJC)	2016～2020 年	2016-2017 年に 10 代～70 代であった男性 412 名、女性 450 名の発話によるデータ
	名大会話コーパス(NUCC)	2001～2003 年	科学研究費基盤研究(B)(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(平成 13 年度～15 年度 研究代表者 大曾美恵子)の一環として作成された、129 会話、合計約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパス
	現日研・職場談話コーパス (CWPC)	1993 年 9 月～10 月 (女性) 1999 年 10 月～2000 年 12 月(男性)	1993 年 9 月～10 月の首都圏の有職女性 19 名(20 代～50 代)と 1999 年 10 月～2000 年 12 月の首都圏の有職男性 21 名(20 代～50 代)の職場での自然談話
	日本語諸方言コーパス (COJADS)	1977～1985 年	文化庁が 1977～1985 年に行なった「各地方言収集緊急調査」の方言談話の収録データ
	昭和話し言葉コーパス (SSC)	1950 年代～1970 年代	1950 年代から 1970 年代に国立国語研究所で録音された約 44 時間分の音声データ(17 時間分の独話、27 時間分の会話)と、その関連データ(転記テキスト、約 53 万語分の形態論情報データ、メタデータ等)

3.3 検索・手法

表1の9種のコーパスにおいて、まず国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション「中納言」を介して「思い出」の使用の有無を確認し、使用されている場合は、「思い出」に後続する格助詞を手掛かりに、動詞文での動詞ごとの頻度を確認する。

「思い出」の表記形態は、「思い出」「思出」「おもい出」「おもいで」「想い出」「思ひ出」等があるため、検索において語を指定する際は「語義素」の「思い出」を指定する。また、「おもいで」の平仮名表記の場合は、「30 キロの道のりをやっとなのおもいで、歩き切った」等、「思い」に「で」が後続するものも含まれる。また反対に「思い出」とあっても、「思い」に後続する「で」の表記ミスの場合もあるため、最終的には、目視で対象外のものを除外する。

さらに、「をたよりに」や「を通して」等の副詞句相当語句を形成している場合は対象外とする。また、今回使用する書き言葉コーパスで確認できる1文中に、目視で確認しても、述語が含まれていない場合も多く、その場合は、「思い出」に「を」や「が」等格助詞が後続していても、具体的な動詞が意志動詞かが不明であることから、述語が不明なもの、あるいは、動詞文かが確認できないものとして対象外としているが、頻度表には「不明」の語として記載している。

4. 結果と考察

4.1「思い出」の使用状況

書き言葉と話し言葉のそれぞれのコーパス内に見られた「思い出」の使用頻度を表2にまとめる。なお、表2は、「やっとの思いで〜した」のような対象外のデータが、書き言葉コーパスでは1%に満たず、また、話し言葉コーパスではそもそもの使用頻度が低いことから、全結果を目視で確認したため、単純な粗頻度での検索結果を整理したのみである。この使用頻度を、少し乱暴ではあるが、均衡的なサンプルデータと捉えて、書き言葉と話し言葉ごとに2群にまとめ、その差を、高見のカイ二乗検定用マクロ(石川他, 2010)で検定してみたところ、話し言葉での使用が多いという結果になった(有意水準0.1%で有意差あり $\chi^2=372.01$, $p=.000$)。

しかし、話し言葉コーパスの頻度はCSJの頻度に偏っている。このCSJは90%が講演録で、書き言葉的な要素の強いコーパスであることから、ここではCSJを除き、CEJC、NUCC、COJADS、SSC、CWPCを総合した話し言葉と、BCCWJ、SHC、CHJを総合した書き言葉での使用頻度を再度カイ二乗検定にかけてみると、表4の調整頻度でも確認できるが、書き言葉での「思い出」の使用率が高くなる(有意水準0.1%で有意差あり $\chi^2=133.85$, $p=.000$)。つまり、「思い出」は会話での話題に上りやすい語というよりは、記述の際に利用される語だと推測される。

表2

9種のコーパスでの「思い出」の単純使用頻度(粗頻度)

	総語数	「思い出」	小計
BCCWJ	124,100,964	3,037	4,377
SHC	38,030,044	1,138	
CHJ	20,774,146	202	
CSJ	7,605,602	585	697
CEJC	2,421,162	25	
NUCC	1,412,018	14	
COJADS	1,287,463	56	
SSC	529,122	15	
CWPC	248,677	2	

表3

書き言葉コーパス3種と話し言葉コーパス6種の調整頻度(‰)

	書き言葉	話し言葉
思い出	23.93	51.61

表 4

書き言葉コーパス 3 種と、CSJ を除いた話し言葉コーパス 5 種の調整頻度(%)

	書き言葉	話し言葉
思い出	23.93	8.29

4.2 「思い出」と共起する格助詞と動詞

では、書き言葉コーパスである BCCWJ と SHC 内の「思い出」の使用例には、他動性の高い意志動詞と状態性を表す動詞と、どちらの用例が多く見られるのか。

まず、そもそも「思い出」が、どの程度書き言葉で使われる語か確認しておく。書き言葉コーパスのうち、現代語のコーパスである BCCWJ と SHC における「思い出」の全使用頻度を表 5 に、また、「思い出」の直後に後続する格助詞ごとの全使用頻度(調整頻度:百分率)を表 6 に示す。どちらも、対象外を 1%程度含む全頻度の粗頻度と調整頻度であるが、表 5 からは、どちらの書き言葉コーパスでも、「思い出」の使用率が、おおよそ、同程度見られることが認められ、表 6 からは BCCWJ でも SHC でも、「を」「が」「の」の 3 つの助詞が「思い出」に後置されることが多いこと、さらに、「を」「が」の使用頻度に大差がないことが認められる。また、格助詞以外も含めて、後続する助詞では「の」が多いことから、「思い出」は動作の対象等として使用されるのと同程度、名詞修飾の形で利用されることもうかがえる。

表 5

BCCWJ と SHC の使用頻度(粗頻度・調整頻度%)

	BCCWJ	SHC
総語数	124,100,964	38,030,044
思い出(粗頻度)	3,037	1,138
思い出(%)	24.47	29.92

表 6

BCCWJ と SHC での後置格助詞別使用頻度(%)

	BCCWJ	SHC
を	3.74	4.71
に	2.88	2.37
が	3.45	4.58
で	0.13	0.05
だ	0.80	0.84
です	0.66	0.39
の	3.46	4.47

なお、表 5、表 6 は、単純に「思い出」の直後に後続する格助詞の使用頻度である。直後に後続する「を」と「が」の使用状況は同程度であったが、「が」の場合は、意味役割が対象ではないものも

含まれる可能性があり得る。また、「を」が直後に続く以外にも、取り立てられて「は」となっている場合もあるだろう。さらに、直後ではなく、より後ろで使用されている場合も考えられる。

そこで、「思い出」が動作の対象となる用例のみを目視で確認してみたところ、BCCWJ では、対象の「を」が 475 例、「が」が 187 例、また SHC では「を」が 188 例、「が」77 例見られた。百万語あたりの調整頻度で整理したのが表 7 である。どちらの書き言葉コーパスでも、「思い出」は「を」格の対象として使用される頻度が高いと考えられる。

表 7

BCCWJ と SHC での「対象」の「を」「が」使用頻度(%)

	対象の「を」	対象の「が」
BCCWJ	3.83	1.51
SHC	4.94	2.02

表 7 は、「を」を取る他動詞や「が」を取る自動詞の全使用頻度であるため、さらに細かく見るために、全使用例を頻度表に整理し、動詞の意味毎にまとめた。これは巻末資料として添付する(資料 1-1、資料 1-2、資料 2-1、資料 2-2)。

この頻度表に基づいて、「を」を取る動詞にどのような意味の語が多いのかを見るために、巻末の資料 1-1、1-2 を種類ごとにまとめてみた(図 1)。図 1 は BCCWJ と SHC で検索されたヲ格を取る動詞をその意味の概要を見るために構成比率に整理した円グラフである。これらを見る限りでは、比率の違いはあるものの、「思い出」という語が、「作る」も含まれる「～する」といった行動の対象、「話す」「語る」といった口頭表現対象、「書く」「残す」といった記述対象、「抱える」「秘める」「持つ」といった内包・保有行為の対象になりやすく、また、「思い出」は、「語る」「残す」といった他動性が明確で、「記憶」と意味上の関連性がある動詞との共起が多いと考えられた。なお、「作る」との共起も見られるが、他の語に比べるとそれほど多くはないこと、さらに、他動性の高い語の中でも、「記憶」と意味上の関連性がある動詞との共起の方が多く見られることから、意味上の親和性のある語との結びつきという一定の傾向があり、そのために、共起上、意味の関連性や語義動詞の親和性における制約があることが考えられる。

また、「を」に継続する他動詞、「が」に継続する自動詞の中に、「ている」「てくる・ていく」「ておく」等、いわゆる、補助動詞を承接するもの、また、受身形、使役形で利用されているものが散見された。補助動詞や接尾辞を承接すると、統語構造が変わり、他動詞は状態性が高まり、自動詞は動作性が高まる。また、自動詞の統語構造を持ちながらも、動詞が他動詞である場合も見られた。それら自他の入れ替わったものを除くと、「を」は他動詞、「が」は自動詞と、明確に分かれていた。

さらに、1 文の構造や、動詞の使用形態別にその使用頻度を数え、表 8、表 9 に整理した。表 8、表 9 は、BCCWJ、SHC それぞれの使用頻度(粗頻度)であるが、数の上では、対象となる意味役割を示す「を」も「が」も、基本的には、「を」は他動詞、「が」は自動詞と共に使用されていることには変わらないことが認められる。また、「思い出」が単独で他動詞と利用される場合と自動詞と利用される場合を考えると、BCCWJ と SHC ごとの頻度差はあるものの、どちらも「他動詞単独」での

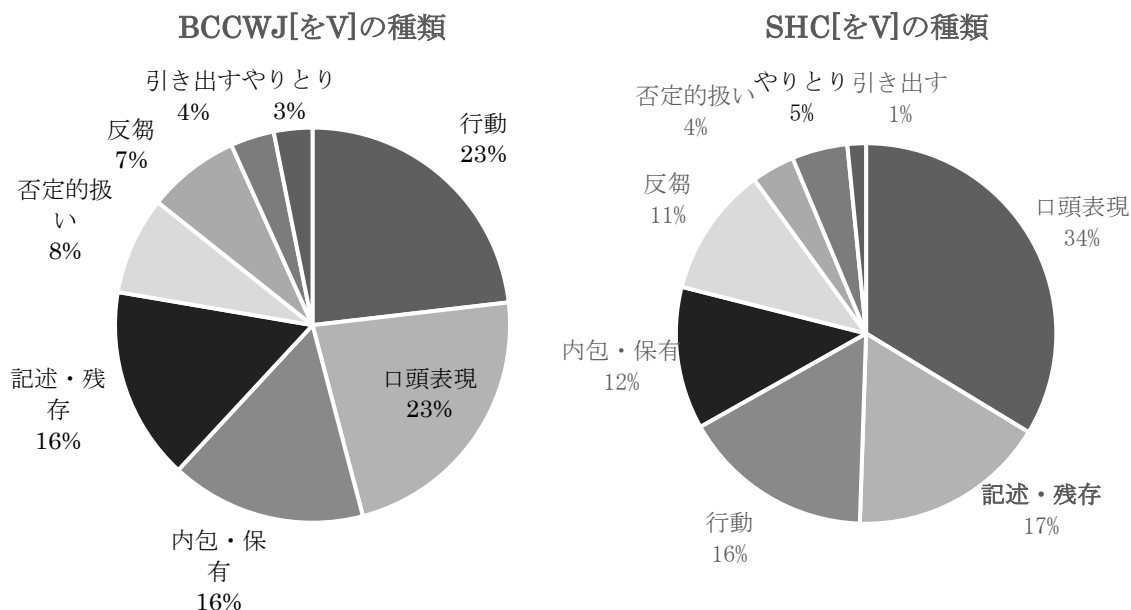


図 1 書きことばコーパス内の「思い出」「を」と共起する「動詞」の意味

使用頻度の方が高く、表 7 でも見たように、基本的に、「思い出」は他動詞の対象となる語だと考えられる。

ただし、「を」の場合、中に、統語構造が変わる受身形、使役形、さらに、「を」以外に「に」を必須格とする 2 項動詞の用例や、状態性の高まる「ている」「てくる・ていく」という補助動詞が接続することで他動性が低くなる用例も見られる。また、「が」の場合も、2 語が組み合わさる複合動詞で、その後続の動詞は自動詞だが、他動詞と組み合わさるものもあり、さらに、統語構造が自動詞を用いたときの構造で、すなわち、「が」で「思い出」を対象とする文の形をとりながら、その動詞が他動詞である場合も見られた。

一方、自動詞に、さらに「ている」「～てくる」等をつけ、より状態性が高まる形で利用される向きもある。これらを、統語的な観点から見ると、自他動詞の混同かもしれないが、混同が見られること自体が他動詞の自動詞化ではないかと考えられよう。

表 8

BCCWJ の中のヲ格を取る動詞・ガ格を取る動詞の文構造と語の使用形態(粗頻度)

を総数		475			が総数		187		
～を 他動詞	451	→	語形態		～が 自動詞	161	→	語形態	
～をV れるせる	16		他動詞単独	441	が～V れるせる	28		自動詞単独	181
～を～に V	7		複合動詞	49	が～に/く/と_なる	7		複合動詞	24
			ている	62				ている	44
			てくるていく	9				てくるていく	27

SHC:ヲ格を取る動詞・ガ格を取る動詞の文構造と語の使用形態(粗頻度)

以上、本節では 4.1 の概略をより細かく、書き言葉コーパスである BCCWJ と SHC 内の「思い出」の使用例で、意味役割が「対象」の「を」「が」と、意志性、状態性が問題となる自動詞、他動詞の関係を見た。そして、自・他動詞の利用状況が、基本的に、「を」は他動詞、「が」は自動詞と共起し、格助詞を手掛かりに、共起する動詞の性質をおおよそ考えることには問題がないこと、ただし、その構造を操作する補助動詞やボイス表現の利用も多く見られること、統語構造において自他の区別が錯綜している状態が認められることが確認された。若干、変化の兆しがあると考えられた。

表 10

BCCWJ と SHC での《「思い出」「を」》年代別使用頻度(粗頻度)

4.3 《「思い出」「を」》の経年変化

74

表 11

BCCWJ と SHC での《「思い出」「を」》年代別使用頻度(‰)

	BCCWJ	SHC
を_90	0.93	3.47
を_2000	2.81	0.66
を_2010	0.00	0.58

念のために、CHJ にも「思い出」が使用されているのか見てみたが、202 例の結果のうち、「を」が後続する用例は 11 例で、「が」が後続する用例は 9 例であった。また、「を」は 1592 年の『天草版平家物語』の用例もあるが、「が」は 9 例全てが近代以降の用例であった。近代の用例は 148 例であったが、そのうち 47 例は「思い出」に続く格助詞が「に」「の」で、百万語当たりの調整頻度で他のコーパスと比較してみると、古い年代の CHJ と現代語の BCCWJ、SHC とでは使用される格助詞の傾向が異なることが見て取れる(表 12)。

表 12

CHJ を加えた「思い出」と後続の格助詞別使用頻度(‰)

	BCCWJ	SHC	CHJ
を	3.74	4.71	0.53
に	2.88	2.37	1.78
が	3.45	4.58	0.43
で	0.13	0.05	0.00
だ	0.80	0.84	0.00
です	0.66	0.39	0.00
の	3.46	4.47	1.73

「を」格が動作の対象として使用されている用例は古くから見られたが、「が」格が動作の対象として使用される用例は、近代までさほどなかった可能性が考えられた。昭和のごく初期からの 7 年ほどのデータがコーパスに含まれていないが SHC でも、「思い出」と「を」と他動詞の組合せの使用例の方が多いこと、BCCWJ と SHC の両方で、「思い出」「を」と共起する動詞の種類あ、ほぼ同様で、意味の上で「記憶」に関する他動性の高い動作動詞が多いことから、他動性の動詞の対象として「思い出」が使用されるという使い方が見られると言える。つまり、「思い出」は「を」と他動詞と合わせて使用される形が、基本的な使い方だと考えられる。

ただ、書き言葉として「思い出」をヲ格で利用する場合の使用頻度が、平成の後期に少なかった。コーパスのデータの収集法の影響もあるが、その使用法が廃れてきている可能性も否定できないのではないかと。もし、そうだとすると、語感の元となる、辞書的意味以外の、文法的、社会的意味である、語に備わる共通認識が、平成前期と、平成後期では異なっている可能性、すなわち、平成後期以降に、変化している可能性がある。変化が起こっているとすれば、違和感の声が上がる一方で、違和感なく語を使う場合も多いという現状が出来ることも、ある程度、仕方がないとも考えられる。

5. まとめ

国立国語研究所言語資源開発センター公開の書き言葉コーパスと話し言葉コーパスを用いて「思い出」という語について使用頻度を、雑駁に、調べてみたが、「思い出」は、話し言葉よりも、書き言葉的な性質、すなわち、客観的記述で使われる語であることが確認された。また、他動性の指標であるヲ格と、それに続く動詞を見たところ、「作る」という意志性・他動性の高い語の使用例も見られたが、どちらかと言えば、結果的に得られた「思い出」を、事後にどのように扱うかを表す表現が主流であった。「思い出」は、「語る」「残す」といった他動性が明確で、かつ、「記憶」と意味上の関連性がある動詞との共起が多く、意味の上での親和性に関する制約があり得ると考えられる。

また、現代語の書き言葉では、平成の後期の時期から、「思い出」「を」の共起での使用頻度の増減が見られたが、歴史的には、「思い出」「を」他動詞の共起の方が古くから見られることから、意志性の高い動作の対象として使用の方がより基本的な使い方であると考えられた。そうすると、現代語では、自動詞的な用法が増えたとも言え、さらに、書き言葉コーパスの用例を見ていくと、他動詞を自動詞と同様の文構造で使用する例や、補助動詞や接辞を使い、より状態性の高い表現で使用する例も見られ、自他の区別において、なんらかの変化の兆しが見えてくる。

ただし、書き言葉における自他の区別の変化と「思い出」「を」の使用頻度の年度別増減とがどのように関係するのか不明である。また、今回は単にコーパス間の使用例によって探索的な確認を行ったのみである。近代以降の「思い出」の統語上の意味役割に変化について考えるためには、辞書の第1義と第2義の認識の差の検討や、自発性が高い語や結果的に見出される他の語の用例と合わせて、同類のものを見渡すような、より詳細な検証が、今後、必要である。

引用文献

- Fujimura, Itsuko, Shoju Chiba, Mieko Ohso, 2012, Lexical and Grammatical Features of Spoken and Written Japanese in Contrast: Exploring a lexical profiling approach to comparing spoken and Written corpora, *Proceedings of the VIIth GSCP International Conference. Speech and Corpora*, 393-398.
- Hopper, P. and S. Thompson., 1980, Transitivity in Grammar and Discourse, *Language*, 56, 2, 251-299.
- Lakoff, G., 1977, *Linguistic Gestalts*, Chicago Linguistic Society.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(2010)『言語研究のための統計入門』三省堂.
- 小野良美(1995)「日本語の他動性: 意志性を中心に」『英米文学研究』31 巻, 265-280.
- 国立国語研究所(2011)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)
(<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/index.html>) (2024 年 3 月 11 日確認).
- 小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・田中牧郎・間淵洋子編(2023)『昭和・平成書き言葉コーパス』(<https://clrd.ninjal.ac.jp/shc/>) (2024 年 3 月 11 日確認)
- 小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・間淵洋子編(2024)『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計・構築・公開」『情報処理学会誌』65(2), 278-291.

森田良行(1989)「第4章 意味」加藤彰彦・佐治圭三・森田良行(編)『日本語概説』105-106,
(株)おうふう.

国立国語研究所(2023)『日本語話し言葉コーパス(Corpus of Spontaneous Japanese :
CSJ)』(<https://clrd.ninjal.ac.jp/csj/index.html>) (2024年3月11日確認).

国立国語研究所(2023)『日本語日常会話コーパス』(Corpus of Everyday Japanese
Conversation, CEJC) (<https://clrd.ninjal.ac.jp/cejc/index.html>) (2024年3月11日
確認).

大曾美恵子(2003)『名大会話コーパス』(Nagoya University Conversation Corpus; NUCC)
(<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/>) (2024年3月11日確認).

国立国語研究所(2023)『日本語歴史コーパス』(<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>) (2024年3月
11日確認).

国立国語研究所(2023)『日本語諸方言コーパス』(Corpus of Japanese Dialects:
COJADS) Ver.2023.03 (2024年3月11日確認).

小学館(2003.10)『デジタル大辞泉』(<https://dictionary.goo.ne.jp/jn/>) (2024年3月11日
確認).

角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版.

資料 1-2 SHC 内の「思い出」「を」に続く他動詞一覧(1行目はカテゴリ名と合計粗頻度)

記述・残存	32	やりとり	9	反例	20	行動	31	内包・保有	23	否定的扱い	7
書き送る	1	聞かされる	2	振り返る	6	拾う	3	持つ	9	消す	1
書き溜める	1	共有する	2	懐かしむ	4	蘇らせる	3	留める	2	絶つ	1
書きとめる	1	与える	1	反例する	2	集める	2	胸に。	2	否定する	1
書く	16	聞かせる	1	愛する	1	作る	2	抱え込む	1	振っ切る	1
記す	4	くれる	1	味わう	1	まとめる	2	記憶する	1	忘れる	3
著する	1	断られる	1	ありがたう	1	追う	1	背負う	1		
綴る	2	提供される	1	回想する	1	飾り立てる	1	包み込む	1		
遺す	1			揺き立てる	1	からめる	1	詰める	1		
残す	5			昇華させる	1	刻み付ける	1	秘め持つ	1		
				辿る	1	潜り抜ける	1	胸に暖める	1		
				振り返られる	1	混じえる	1	胸にししまう	1		
						仕上げる	1	胸に秘める	1		
						過ぎ去らせる	1	巻き込む	1		
						清算する	1				
口頭表現	64	引き出す	3			体系づける	1				
語る	50	聞く	1			大事にする	1				
口にする	2	誘う	1			帳消しにする	1				
囁く	1	引き出す	1			創り出す	1				
吐露する	1					定着させる	1				
述べる	1					できる	1				
話させる	1					運ぶ	1				
話す	8					附加する	1				
						分ける	1				
						纏める	1				

資料 2-1 BCCWJ 内の「思い出」「が」に続く自動詞一覧(1 行目はカテゴリ一名と合計粗頻度)

存在・所有	38	生起・増加	37	関係・変化・移動	25	繰り返し	52	状態	27	消失	11	記載・残存	34
詰まる	24	できる	20	つきまとう	3	よみがえる	46	浮かぶ	6	消える	2	残る	27
込められる	4	出る	4	駆け巡る	2	たちかえる	1	あふれる	4	消え去る	1	しみこむ	2
こもる	3	作られる	3	まつわりつく	2	呼びさまされる	1	重なる	2	消化される	1	書かれる	2
増える	3	加わる	2	結びつく	2	思い出される	1	働く	2	浸食される	1	刻まれる	2
置いてある	1	浮かび上がる	1	遠のく	2	蘇生する	1	溢れ出す	1	忘れられる	1	捉える	1
配置される	1	おしよせる	1	共有する	2	フラッシュバックする	1	ふきあがる	1	喪う	1		
秘められる	1	生き続ける	1	かけまわる	1	戻る	1	立ちはだかる	1	薄れる	1		
よどむ	1	湧き出る	1	組み合わせられる	1			傷つけられる	1	飲み込まれる	1		
		奮い立たせる	1	通り過ぎる	1			凝縮される	1	奪われる	1		
		現れる	1	崩れる	1			灯る	1	尽きる	1		
		生まれる	1	かける	1			美化される	1				
		思える	1	育つ	1			似る	1		3	表現	6
				ただよう	1			にさせる	1			語られる	2
				飛ぶ	1			決めさせる	1			物語る	1
				流れる	1			沈む	1			映し出される	1
				広がる	1			勝る	1			映る	1
				よぎる	1			満たす	1			描く	1
				聞く	1								

資料 2-2 SHC 内の「思い出」「が」に続く自動詞一覧(1 行目はカテゴリ名と合計粗頻度)

存在・所有	117	生起・増加	11	関係・変化・移動	9	繰り返し	27	状態	11	消失	12
ある・ない	111	生きる	1	つながる	2	よみがえる	8	からんでいる	2	消える	3
詰まる	1	増える	1	続く	1	起こる	1	しみこんでいる	2	つきる	2
詰まっている	4	できる	1	流れる	1	さかのぼる	1	きらめいている	1	うすらぐ	1
こもっている	1	登場する	1	役に立つ	1	よぎる	1	ひそんでいる	1	とだえる	1
		浮かんでくる	2	たゆたっている	1	湧く	1			消えていく	2
		おしよせてくる	1	流れている	1	残る	1			消えてしまう	1
記載・残存	4	こみあげてくる	1	つながってしまふ	1	残っている	5	述語不明	8	浸食されていく	1
記されている	2	出てくる	1	流れ込んでくる	1	よみ返ってくる	8			夢破れる	1
つづられている	1	始まっている	1			戻ってくる	1				
刻まれ続けていく	1	湧き出てくる	1								

